

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

■ 研究プロジェクト報告

■ 研究プロジェクト

クリスチャン・シオニズムに関する思想史的研究

「クリスチャンシオニズムに関する思想的研究」プロジェクトは、クリスチャン・シオニズムの起源と進展の経緯を、聖書学、神学、哲学、歴史など多角的な視点によって明らかにし、今日のイスラエル・パレスチナ問題に対して学術的観点から提言をすることを目指している。二〇二三年一月に始まったイスラエルとパレスチナ側の武装勢力ハマスとの対立、その後のイスラエルによるガザ地区への攻撃は、二〇二五年一〇月に停戦合意によって表向きは終結したが、その後も爆撃は続いている。それに加えて、中東での覇権を握りたいイスラエルの思惑もあり、二〇二六年に入ると、アメリカ合衆国はイランを攻撃するに至った。

イスラエルの植民や中東での覇権拡大をアメリカ政府が支持する理由の一つに、シオニズムを支持するキリスト教徒たちの存在がある。イスラ

エル国家を支持するためにパレスチナやイランに対する暴力を度外視するというクリスチャン・シオニストの姿勢に対し、具体的な提言を行うことを目指し、本プロジェクトは、彼らがシオニズムを支持するようになった歴史的経緯、そしてその元にある終末論理解を確認、検討するべく調査研究を進めている。

二〇二五年度は、メンバーの原田雅樹氏のシオニズムと哲学思想に関する著作のドラフトの検討、David Hummel の著書 *The Rise and Fall of Dispensationalism* (Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 2023) の講読を実施、『福音派：終末論に引き裂かれるアメリカ社会』（中公新書、二〇二五年）を上梓された、立教大学の加藤喜之氏（立教大学）に公開研究会で講演いただいた。これらに合わせ、加藤教授も参照していた Hummel の論文“A Practical Outlet” to

Premillennial Faith: G. Douglas Young and the Evolution of Christian Zionist Activism in Israel” (Cambridge University Press: 18 June 2018) などを購入し、一九六七年度の第三次中東戦争以降、キリスト教保守派の福音派が中心となった現在に続くようなクリスチャン・シオニズムが始まる経緯を理解した。つまりイスラエルの中東戦争での圧勝によって、ホロコーストへの反省からイスラエルを支持していた西欧諸国やリベラルな米国人がイスラエルに距離を置くようになり、それと交代する形でそれまでイスラエルへの関心の薄かった福音派がシオニズムを熱心に信奉するようになったのである。この時期以降、イスラエルでも過去の記憶に基づく集団の結束を強め

る形のナシヨナリズムが始まり、一九七七年には初めて現在のネタニヤフ首相の所属政党であるリクード党が政権を握ることになる。加えて、同時多発テロによって反イスラム感情が高まった二〇〇〇年代初頭もシオニズムが高まった時期であることがわかった。

以上の研究をふまえ、今年度は、一九六〇年代以降の転換期に注目しながらクリスチャン・シオニズムについて調査を進め、年明けの一月に研究成果を披露するシンポジウムを開催する予定である。七月には新たにメンバーに加わって頂いた大宮有博氏の著書『キリスト教シオニズムとは何か』（日本基督教団出版局、二〇二五年）の合評会も開催する。（報告者 主任研究員 柳澤 田実）

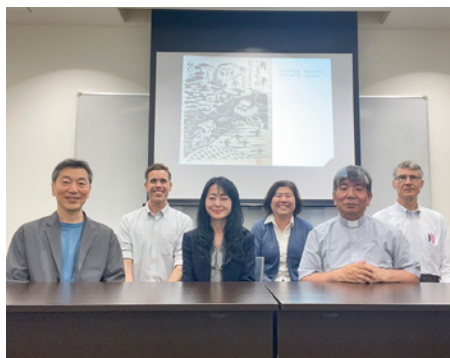
■ 研究プロジェクト

キリスト教主義教育の可能性と実践――

well-being を共に生きるために

本研究プロジェクトは、昨年度、様々な分野で広く用いられている“well-being”をめぐるその語義や歴史を振り返り、それらが具体的にどのような

展開されているのかを、講演会や公開研究会、フィールドトリップ等とおして、向谷地生良先生、牛田匡先生、そして賀川豊彦氏の具体的な実



実践内容から考察しました。そのうえで、各研究員は今年度、以下の方向において各自の研究を継続しています。

まず、デンマークの出身でもある Esben Petersen 主任研究員は、毎年世界幸福度ランキングの上位に位置するデンマーク、すなわち、一般に「幸せの国」と呼ばれるデンマークについて、その well-being を分析的に再考します。Andreas Rusterholz 主任研究員は、福音書のなかでイエスが自分を求める大勢の群衆に「幸いである」と宣言しているマカリズムに着目し、聖書が真に伝えようとする well-being の提示を試みます。大宮有博研究員は創世記における安息日の記述をもとに人間にとつての休息の本質をとらえ直し、そこ

から well-being というあり方に迫ります。李善恵研究員は、多種多様な福祉活動により、今日の社会福祉思想や実践にも大きな影響を及ぼしている賀川豊彦に着目し、その思想のなかに見られる well-being の理念や特徴を明らかにします。岩坂二規研究員は、気候変動、環境破壊、貧困、人権問題といった現代を取りまく地球規模の課題をあらためて検討し、それらに少からず影響を与えめる ESD（持続可能な開発のための教育）について、教育のスピリチュアリティの視点から論じます。梶原直美主任研究員は、現代に生きる人々、特に学生たちが創世記の示す「よい」存在として自らの生を歩むために、チャペル等での「神の前に」(coram deo) 立つという体験をおして、いかに well-being を回復できるかにについて探究します。

以上のほかに、前述の講師を担ってくださった向谷地生良氏と牛田匡氏の研究内容を加え、次年度にはこれらを研究成果として出版することを目指しています。

なお、前年度が刊行の年であった『建学の精神考 第六巻』は、二〇二〇年度以降の五年間のなかでその年の状況を

反映しつつ建学の精神として継承されている内容について、編集者による取捨選択を経て、

予定どおり二〇二五年一二月に刊行されました。

(報告者 センター長 梶原直美)

■キリスト教と文化シリーズ (3) ノアとワイン

詩編一〇四編では、天と地を

創造された神が、人の心を喜ばせるためにぶどう酒を、人の心を強くするためにパンを造られたと述べられている(一四節―一五節)。しかし、『箴言』では、「ぶどう酒は嘲り、麦の酒は騒ぎ、これに迷わされる者が知恵を得ることはない」(箴言二〇章一節)とされている。神が造ったものにもマイナス面はあるという紛れもない事実について、何らかの説明が必要だったので、ラビ・タンフマ・バル・アツバ(四世紀)は、神に責任を転嫁しないような説明を考えた。彼は、ぶどう



Willem Vorsterman's 'De Bibel' (Antwerp, 1528)
© The Trustees of the British Museum.
(CC BY-NC-SA 4.0)

畑を作った農夫ノアの物語(創世記九章二〇節―二二節)ほどふさわしいものはないと思いい、以下の解説を付け加えた。ノアがぶどうを植えようとしていたところ、サタンが寄ってきて手伝いを申し出た。ノアが快諾した後、二人は作業に取りかかった。サタンはまず小羊を一匹屠り、その後ライオンと豚と狼を一匹ずつ屠つて、それらの血をぶどうの木に根っこにかけた。彼は、ノアがぶどう酒を飲む前は小羊のように潔白であることを示すためにそうした。ぶどう酒をほどほど飲んだノアは、ラ

イオンのように強い気分になり、自分より強い者はいないと自慢する。飲みすぎると、豚みたいに振る舞って泥の中で転げ回り、泥酔してしまうと、彼は猿のよ

うに、踊り狂い、ヒステリックに笑い、支離滅裂なことを喚き散らして、最後には自分が何をしているか分からなくなってしまうとした。その教訓は、義人ノアでさえそのような振る舞いをしたのだから、他の人々はなおさらのことだということだ(ミドラッシュ・タンフマ、ノア一三)。事程左様に、飲酒は一人ひとりの責任であるということだ。

挿絵は、一五二八年に現ベルギーのアントウェルペンで刊行された聖書に収録されたものである。注目すべき点は、ハムが兄弟に父について報告している場面の背景で、ぶどうの木だけでなく、ぶどうを食っている雄ヤギがいることである。ぶどうを食うヤギは、『イソップ寓話』『ヤギとブドウの木』には登場するが、ノアと雄ヤギを描いた絵画は他に存在しない。ヤギは悪魔の象徴と見なされていたことを踏まえると、このヤギは、ぶどう酒の栽培に携わった悪魔を示唆しており、イソップ寓話のヤギと同じ運命を辿り、殺されてしまうことになるだろう。ただ、酔っ払いの四つの段階には変わりはない。

(報告者 主任研究員

Andreas Rusterholz)